

自閉症スペクトラム青年へのコミュニケーションに対する パッケージ型セルフ・マネジメント手続きに関する検討（１）

日本のコミュニケーション・スキルとモニタリングに関する２種類の質問紙尺度得点の変化から

○山田友哉

井澤信三

（兵庫教育大学大学院学校教育研究科）

（兵庫教育大学大学院）

KEY WORDS：会話スキル セルフ・マネジメント手続き 短期指導

【目的】

自閉症スペクトラム (ASD) 者の社会的コミュニケーション支援としてセルフ・モニタリングの有効性が示されている (Koegel, Park, & Koegel, 2014) . しかし, 参加者がモニタリングする標的行動は研究者により選定された研究が多く, モニタリングする標的行動を参加者自身が選定する手続きは十分に検討されていない (Southall & Gast, 2011) .

本研究は, 汎用的なコミュニケーション・スキル獲得のため, 参加者自身が目標を設定し, 目標を自己モニタリングしながら, 話し方を修正するパッケージ型のセルフ・マネジメント手続きを実施した. その指導効果を日本のコミュニケーション・スキルとモニタリングに関する２種類の質問紙尺度得点の変化から検討することを目的とした.

【方法】

参加者 研究参加者は 18～24 歳 ASD 青年男性 3 名 (参加者 A・B・C) と協力者 1 名であった. 参加者のうち, 2 名は高等学校卒業後, 事業所や専門学校等に通学通勤し, 1 名は高等学校卒業見込みであった. 参加者 A は 24 歳で, FIQ=87 (WISC-III ; 17 歳時) であった. 参加者 B は 21 歳, 検査結果は不明 (FIQ は推測 80 程度, 田中ビネー知能検査; 19 歳時) であり, 参加者 C は 18 歳, FIQ=99 (WISC-IV ; 13 歳時) であった. 3 名とも以前に同施設の集団療育を複数回受けていた. なお, 本研究の実施時に, 口頭説明と書面にて同意を得た.

期間 20XX 年 11 月～20XX+1 年 3 月に, D 市発達センターにて月 1 回程度合計 6 回実施した.

研究デザイン 本研究は事前事後デザインにて実施した. 研究の流れは, 同一テーマに関する話し合いを 5 分間 3 セッション計 15 分間であった. これを 1 日に 2 試行を行った. 事前事後で会話に関する質問紙 2 種への回答を求めた.

事前・事後テスト 事前・事後テストは各 1 回ずつであった. 各参加者にカードを 1 枚配り, お互いのカードが分からない条件でそれぞれ持っているカードを質問により当てるゲームを行った. カードは 4 枚のうち 1 枚が異なるものであった. なお, 5 分毎に予想解答の記入を求めた. 主指導者 (MT) からゲームの説明のほかに自分の持っているカードの主張や直接的な質問を禁じ, 間接的で上手な質問をするように教示した.

介入期 介入は全 4 回であった. 介入期は 15 分の話し合いを通して MT が考えている事物をあてるゲームを行った. 活動開始時にヒントが提示され, 5 分間話し合い, MT への質問を YES・NO 型で決定するように求めた. 5 分後, 参加者からの質問に MT が答えたのち, 第 2 ヒントを提示し, 同様の活動を再度行った. 3 度目は質問ではなく MT に解答する答えを話し合うよう求めた.

1 回ごとに自己教示, 自己観察, 自己評価・自己修正の順に 1 つずつ追加しながら学習した. 介入 4 回目はすべての復習を行った. 自己教示では, ヒントや話し合いをもとに答えの予想を複数と聞きたい質問を最大 3 つ決めて話し合いに臨み, 自己観察では, 自己教示として決めたことを誰かが話題にしたときマークする自己記録をしながら話し合いをするようにそれぞれ教示した. 自己評価・自己修正では, 話し合いの成果を終了時に 100 点満点で評価し, MT からの返答を

聞いて話し合った内容と自己評価のずれをワイナーの帰属理論に基づいた表を参考にしながら内省するように促した.

評価 事前・事後テスト実施時に Takai & Ota (1994) の日本のコミュニケーション・スキル尺度と, 篠ヶ谷 (2020) の他者との相互作用の際のモニタリングを測定する質問紙を授業場面から会話場面に修正し, 対応のある t 検定を行った.

【結果と考察】

参加者の各素点および分析の結果を Table 1 と 2 に示す. 参加者の各素点および合計得点はおおむね上昇していたが, 対応のある t 検定の結果, Takai et al. (1994), 篠ヶ谷 (2020) の質問紙で事前事後得点に, 有意な差は認められなかった ($t_2=-3.88, p=0.06$; $t_2=0.14, p=0.90$) .

本研究の結果は, パッケージ型セルフ・マネジメント手続きによる会話が若干の向上に留まることを示している. そのため, 一連の介入を通して得点変化が乏しいことは, 短期的であったためか, 今回のパッケージ型指導の効果が十分でないことを示唆している. また, 素点を比べると因子ごとの合計平均得点は 1 点程度の微増減が大半であり, 因子内の項目数が異なるため比較は難しい. しかし, 3 名とも共通して向上した「察し能力」と「対人感受性」は, 本音と建前や話の曖昧さを推知する能力を評価していた. これらに加えモニタリング得点に変化がないことから, 自己教示による答えの予想がトップダウン的に, 不均整な会話に対する構えを形成することにつながった可能性がある.

今後の課題として, 1 度のみの教示にとどまらず, 複数回の教示を行うことで各スキルの定着を行った上で検討する必要がある. また, 実際の会話内容の質がどのように向上しているのかを検討する必要があるだろう.

Table 1 参加者の素点

対象者	総合得点(110)		察し能力(30)		自己制御能力(35)		社会的適正(15)		対人感受性(15)		不明確への忍耐力(15)	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
A	56	60	11	12	16	18	12	12	7	8	10	10
B	66	73	15	17	32	30	13	14	3	5	3	7
C	64	67	18	20	16	16	13	13	7	9	10	9
因子平均	62.00	66.67	14.67	16.33	21.33	21.33	12.67	13.00	5.67	7.33	7.67	8.67
標準偏差	4.32	5.31	2.87	3.30	7.54	6.18	0.47	0.82	1.89	1.70	3.30	1.25

対象者	総合得点(80)		自己理解(15)		他者理解(15)		自他差違(20)		活動参加(30)	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
A	54	60	12	14	12	11	11	10	19	25
B	47	47	10	6	5	7	13	14	19	20
C	59	61	10	12	11	11	14	14	24	24
因子平均	53.33	56.00	10.67	10.67	9.33	9.67	12.67	12.67	20.67	23.00
標準偏差	4.92	6.38	0.94	3.40	3.09	1.89	1.25	1.89	2.36	2.16

註：上段 Takai & Ota(1994), 下段篠ヶ谷 (2020)
カッコ内は質問項目の合計得点を表す

Table 2 検定の結果

	t	df	p	d
Ota & Takai (1994)総合得点	-3.88	2	0.06	0.96
篠ヶ谷 (2020) 総合得点	0.14	2	0.90	0.47

（文献）

Koegel, L. K., Park, M. N., & Koegel, R. L. (2014). JADD, 44(5), 1055-1063.
Southall, C. M., & Gast, D. L. (2011). ETADD, 155-171.
篠ヶ谷圭太. (2020). 心理学研究, 91(3), 193-201.
Takai, J., & Ota, H. (1994). JJESP, 33(3), 224-236.
(YAMADA Tomoya, ISAWA Shinzo)